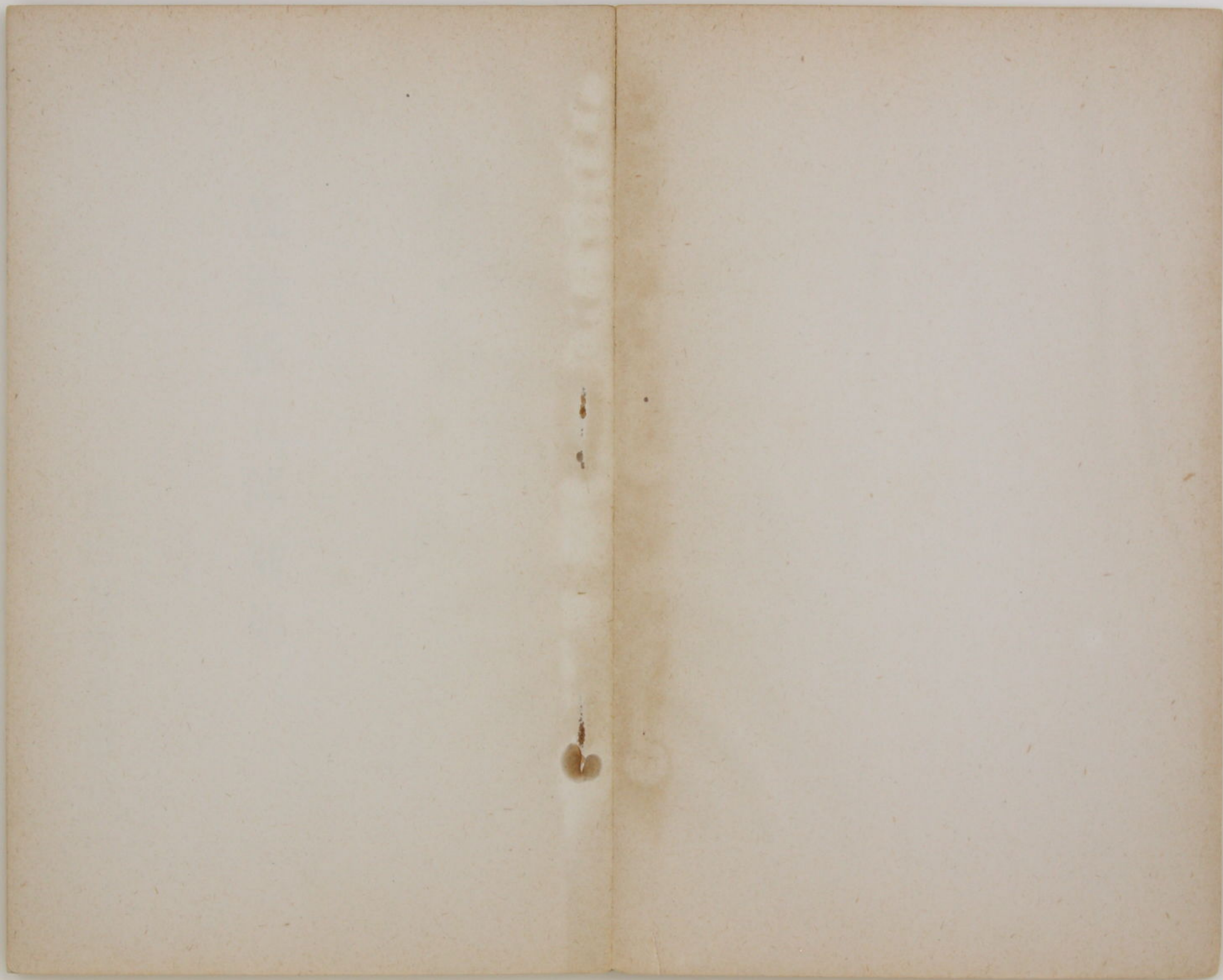


新治韜堂編

渡邊辰五郎翁傳

渡邊校友會發行



新治韜堂編

渡邊辰五郎翁傳

渡邊校友會發行



渡邊辰五郎翁

渡邊辰五郎翁

渡邊辰五郎翁

渡邊辰五郎翁

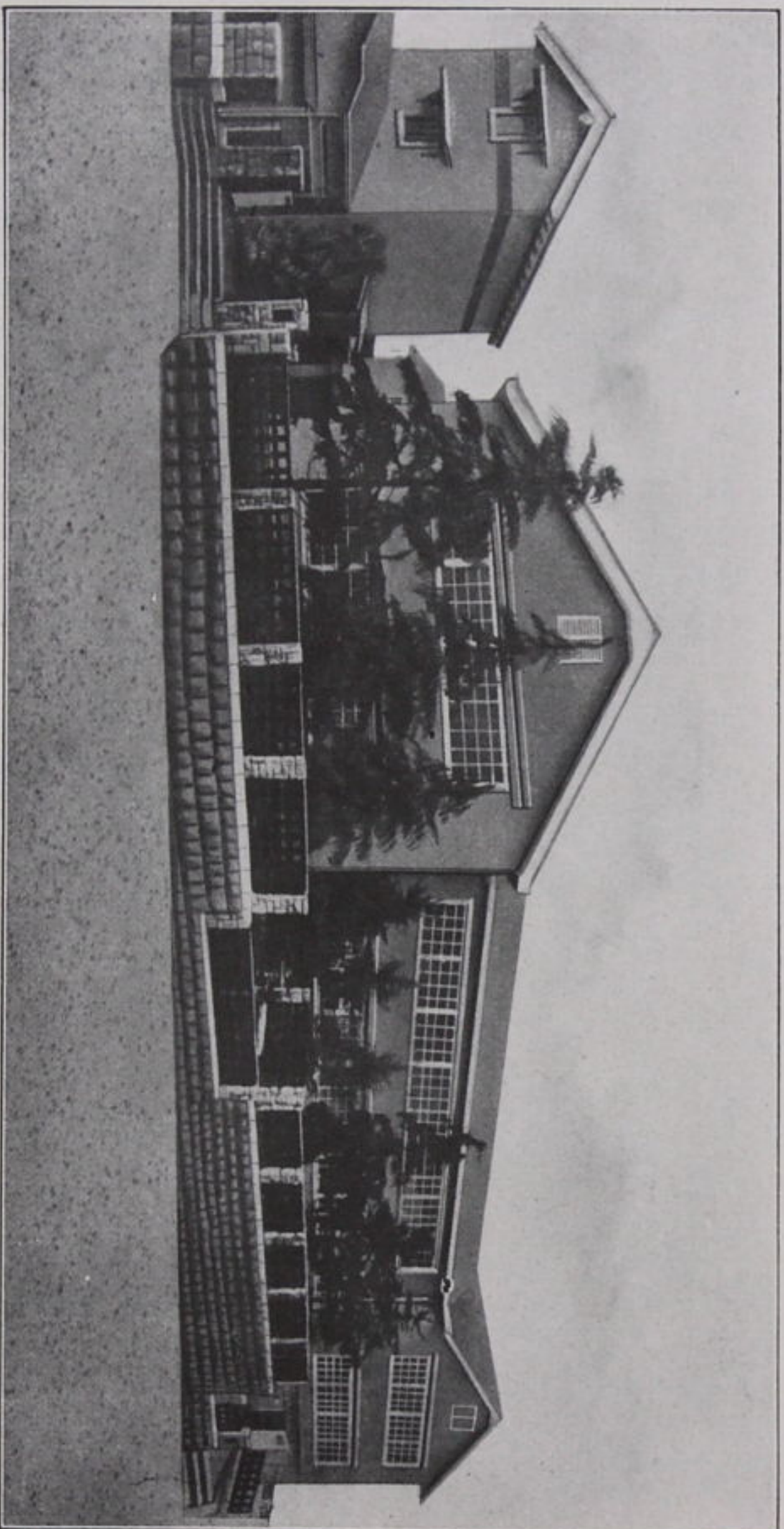


翁の令閨

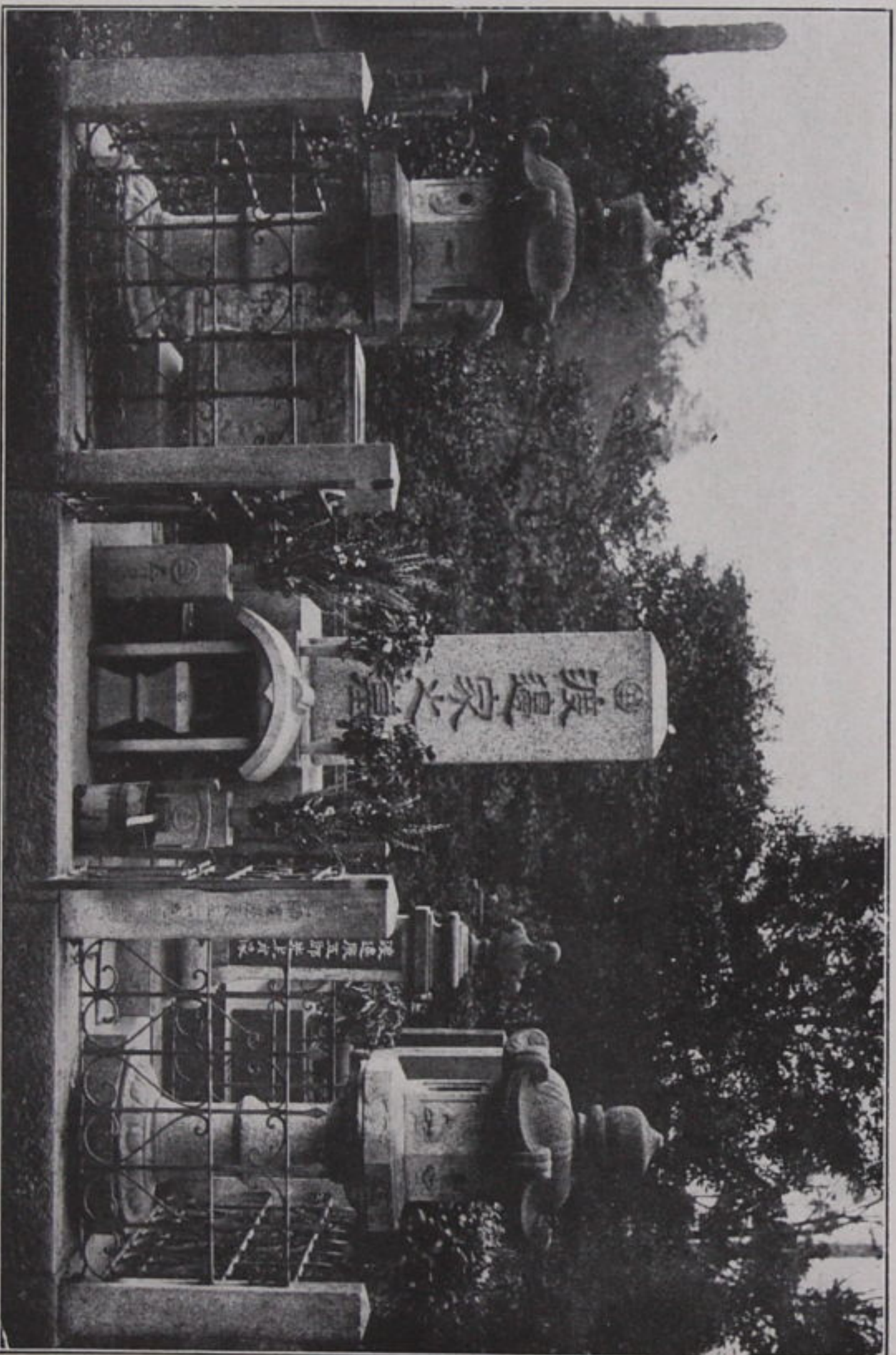


像銅の翁るたれらて建てつ依に人門に前生

吾師渡邊先生通稱曰辰
五郎上總國長南人少游
東京學裁繼細之術歸
鄉歷任諸學校再來東京
為共立女子職業學校裁
縫科主任後辭之自開裁
縫學校於本郷專教予女
四方來學者常數千百人
自明治初至今不知凡幾
萬於是弟子等相謀銅製
先生肖像建于學校前庭
以表景仰之意云
明治三十八年二月



(校學女縫裁京東校學門專子女京東)校學女邊渡の在現



墓の妻夫翁るけ於に中谷

渡邊辰五郎翁傳序

故渡邊辰五郎翁が我邦に於ける科學的裁縫教育の創始者として永く記念すべき教育界の一大恩人であることは、苟も明治以來に於ける裁縫教育發展の事情に通ずる者は何人も首肯する所であらう。今日に於いてこそ、裁縫教育は盛んに行はれ既に高等専門教育の一科と認めらるゝに至りましたけれども、過去を顧みれば裁縫は人間生活の第一條件たる衣、食、住、中の衣の實現手段として欠く可らざるものなるに拘はらず、只家庭内や仕立師の因習傳授に限られ、他の自然界又は社會生活に屬する事物で、必要ではあるが、直接生活に縁遠きことが早くより學術化され、組織的に研究せられ教修されて居たに比すれば其方

法の進歩の遅々たりしは實に不思議なことであります。現に衣と並んで生活に最も必要な食物に關する研究がやうやく近頃に至り榮養研究として科學化せられ來りたるを見ても、人間の知識啓發が近きより遠きに進まずして、却て遠きより近きに達すると云ふ本末轉倒の感を免れない程でありますから、我邦の裁縫教育の組織化が遅れたのは敢て怪むに足りませぬ。渡邊翁が少壯の時より苦心慘憺始めて裁縫教授方法を科學的に組織して裁縫教育の先驅者として斯界に貢献したる功績は永く忘る可らざるものであります。翁の教育界に於ける業績は故那珂通世博士の招聘によりて千葉縣立師範學校に裁縫新教育の先鞭を着けたるに始まり、次て同博士の推輓により現東京女子高等師範學校の前身たりし東京女子師範學校に教鞭を執て裁縫教育の學

術的基礎を拓き、更に女子職業學校の創立によりて裁縫教育の普及に貢献し、次て東京裁縫女學校を創設して益々裁縫教育の發展を促進し、一時斯界に於ける教育者多くは翁の門に出ざるなきの狀を呈したるは天下周知の事實であります。其他裁縫及教授法等に關する幾多の著作を出して裁縫界の面目を一新したる貢獻の大なることもこれ亦洽く世の知る所でありませう。翁の生命たりし、裁縫教育上に於ける偉功は更に申すに及ばず、其經歷に至りては全く立志傳中の人として所謂懦夫をして起たしむべき概があり、又其人格眞摯崇高なること同時に極めて濃厚篤實情誼に渥く、所謂親切の人であつた事は故坪井正五郎博士が翁の歿後に評した通りであります。其才と徳とを兼備したる翁の人格は大に世の範とするに足るものがあります。顧みれ

四
ば私が明治四十年五月翁の病篤きに瀕した際、故那珂通世博士及故坪井正五郎博士と共に其病床に於て東京裁縫女學校の後事に關して遺囑を受けたるは既に二十餘年前の事であります。同じく遺囑を受けたる兩博士は不幸にして所謂墓木既に拱となりましたが、翁の後嗣渡邊女學校々長滋君は能く翁の志を継ぎ經營宜しきを得て校運益々隆昌の域に進みつゝありますから、翁も必ず地下に満足しつゝあると存じます。著者新治韜堂君は多年渡邊女學校の幹事として校長を輔佐して校務に盡瘁し、翁の人物事績に就ては、深く研究しつゝあつたが、一昨年病を獲て、職を辭し、幸にして平癒に向ひつゝあるを利用し、平素の研究の一端を披瀝してこの小傳を著するに至つた。私は新治君のこの著最もよく其人を得たるを喜ぶものであります。勿論翁の事

業の詳細に至ては浩瀚なる大著を要するのでありますが、廣く世に頒つには斯くの如き簡にして要を得たる小傳最も適當であり、私は深く新治君の勞を謝するものであります。又渡邊女學校々友會がこの小傳を發行せんとする先師を憶ふの至情に對しては私は衷心より感銘を禁じ得ず、茲に聊か微言を加ふるの光榮を喜ぶものであります。

昭和四年一月

法學博士 鹽澤昌貞

渡邊辰五郎翁傳自序

余は元來茨城縣の農家に生れ、一時小學校教員になつたものゝ、どうも教育者と云ふ柄でもないので、やめて農政を研究しやうと志し、農商務省に腰辨生活をして居た頃、翁は既に東京裁縫女學校を起し、女子教育に力を盡されて居たので、余は其の人となりを聞き、非常にこれを欽慕し、現代の偉人として心に尊敬して居た。或る時その女學校に裁縫の展覽會があると云ふので、一寸のぞいて見て居る内、フト翁に出遇ひ、某氏の紹介で、一二言普通の挨拶を交はしたただけであつて、別に深い話もせなんだから、人柄もよくは分らないが、どうも如何にも丁寧な、極めて落付いた人で、なる程これではなくては、か程の

大事業は出来ぬと感じた、處が明治四十年五月翁の永眠を聞いて、大に感動し、其の所感を記して、當時の裁縫雜誌に投書したが、後余は故あつて腰辨界を逐はれ妻子眷屬數人を抱へて、立派な失業者となり終り、農政の研究も何もあつたものではなく、何でもござれと衣食の途を求めてあるく内、翁の創立せられた東京裁縫女學校、即ち通稱渡邊女學校に職に就く事となり、知りもせず又豫期もせなんだ裁縫界に、明治四十三年の暮から晩年の全部を送る事となつた、處で翁の葬儀の記事と傳記とを録した追悼録なるものが學校にあつたので、これを見ると、余の翁に對しての所感を、雜誌に書いた左の文が収載せられてあつた、かくばかり尊敬せる人の創立せる學校に御世話になつて餘生を送るべしとは、實に思ひ儲けぬ事だ、これが奇遇とでも

云ふべき事であらう。

偉人を弔す

新治 韜 堂

▲偉人傑士を戰場にのみ求むるは、東洋古今の通弊なり、豈に東郷大將のみ偉大なる業をなすものならんや。

▲偉人傑士豈に政界にのみ限らんや、而も東洋人はこれを他に求めざるは何ぞや、西郷大久保諸公のみ、世の偉大なる業をなせりとすべけんや。

▲東郷や西郷や將た大久保や、國家に貢獻する所、果して偉大なりしならむ、而も吾人に直接なる衣食住に關して、直接に何等の改良をかなせる、直接に何等の工夫をかなせる。

▲渡邊翁は衣服界の偉人也、傑士也、吾人に最直接なる利便を

與へたる人也。

▲人生に直接に利便を與へたる點に於ては、遙に東郷以上なり、西郷大久保以上也。

▲今の世は、クダラヌ論文に、博士の學位を授くる世也、而して翁の如き、極めて眞面目に世を益せし人には、何物をも授けざる世の中也。

▲翁が人生に益せしは、三文文士、屁鉾博士に比すべくもあらず、而も世は生前に何物をも報いざりき。

▲偉人の事業赫々たる、ハデなる事而已ならんや、翁がジミなる一本の針は東郷の劍に比して、豈遜色あらんや。

▲翁が裁縫書は、裁縫界の經典なり、其價值、西郷大久保を飾る維新の歴史に比して、劣るものにあらざる也。

▲翁の後に、更に優れたる裁縫書を著はすものあらん、而も翁の以前に溯りて、翁の功を奪ふ能はざらむ、後に謂ふは易く前に謂ふは難し。

▲翁の直接の薰陶を蒙るもの蓋し幾千、而して枝より枝を生じ間接の教を受くるもの、其の幾十百萬なるかを知らざらむ、否、新らしき衣服を縫ふ婦人少女にして幾分にも翁の改良の恩澤に浴せざるものは、殆どこれなからむ。

▲加之、翁の畢生の事業は、盡く立志篇中の事業也、記して世と後とに傳へば、必ずや見て以て、奮發興起するものあらむ、好鑑也。

▲翁今や良嗣あり、溘焉逝くも瞑すべく、天は紫雲を垂れてこれを迎へむ。

▲嗚呼翁逝け、翁は人として成すべき事を成せり矣。

即ち余は明治四十年翁の永眠の日にして、今の渡邊女學校に何の關係もなき時に於て、翁の人と爲りに敬服して、その傳記を書く事が後人に對する好鑑なるを謂つたのである、況して其後約二十年の歲月を其學校に送り、翁に親炙せる數多の人々に就いて、聞けば聞く程、書いて以て、現世にも後世にも傳へたい心は深かつたが、忙しい務にあつて、これを果す事ができなんだ、然る内に昨年五月より腦溢血で倒れて、今尙半身不隨意なれども二十年前の一念は、これを放棄する能はず、病間を推して、この傳を草した。

筆を起したものと、何時斃れて素志を果す能はざるに至るか

も知れぬが、天幸にこの事を助けたまへ。〔昭和三年九月廿五日記〕
毎日極めて少しづつ筆を執り、再溢血する事もなくて書き終たのが十月二十二日である、天まだ我を棄てず、この一書を成さしめ給へるを感謝しつゝ自ら序す。

昭和四年一月

新治翰堂識す

渡邊辰五郎翁傳

新治 鞆堂 編

人はよく『貧乏の家に生れたから』の『不幸の家に生れたから、何事も出来なんだ』のと云ふものがあるが、裁縫界の偉人渡邊辰五郎翁の傳記を読んだらば、貧乏も不幸も、人の一生の事業に、何の邪魔にもならぬことを知るであらう。又世には細かい針仕事では、どうにもなりやうは無いてはないかと云ふものもあらうが、これ又翁の傳記を読んだらば、その細かい針仕事から、全く腕一本の奮闘努力で、富豪の助力を受けたでもなく、權勢の力を借りたでもなく、營々孜々として、天下に名高い専門學校を、帝都本郷の一角に作りあげた事を知り、裁縫の仕事

が細い仕事でない事を知るであらう、して見ると、又仕事の如何に依つて、名を成せないとか、努力の甲斐が無いとかと云ふものではない事も分るであらう。

以下次々に、其事實を物語らう。

出産

翁は弘化元甲辰年(皇紀二五〇四西紀一八四四)八月八日上總國上埴生郡長南

町(今の千葉縣長生郡廳南町)の父常松母はやとの間の七人の子供の、五人目に生れた、辰年に生れた五人目なれば、そこで辰五郎と云ふ、後世に喧傳せらるゝ名が付いたのであるが、この八日に母は産氣づいて、今將に出産せんとする際に、片田舎の事とて、折しも一匹の暴れ馬が家の内まで飛びこんだために、母は驚いて氣絶した、その途端に生れ出たのであつた、従つてこの急變の爲に驚かされた母には、乳が出なかつた、昔は

子供の名を付けて名を
のん字を
に頼んで
よむな
選ぶらぬ
は入らぬ
こゝろも
判りぬ事
らぬ事

母の死

生れて直に、乳の無い人は一代不幸の人だとよくいつたが、翁は實に世に不幸の第一歩を踏み出したのであつた。

その頃その地方の習慣として、乳の無い子は、飴と甘酒とで育てたものであるさうだ、翁もやはりその方法で育てられたが、次ぎ次ぎに二人の妹が生れた、母は二人目の妹の生れた時に、肥立ちが悪く、遂に三十九歳を一期として、世を去られたのであるが、その時翁はやう／＼五歳であつたと云ふ、何と云ふ不幸な事であつたらう。母の歿後暫くは七人の子供を父の手一つで養育をしたものゝ、家計は困難にてなすべきやうもなければ、止むを得ず、幼き兄弟を、それ／＼分れ／＼に他家に預けた、二人の妹の中一人を、さる家の養女に、残る一人を里方の家に、同じく養女として分け遣した、この時翁はまだ五歳で、

一家離散

叔父の家に引き取られて、はぐくまれたが、夜になると一人寝がさびしくて、蒲團の中で泣きあかした事もあつたと云ふ。

かゝるみじみな事のみで、天未だ幸の曙光をだにも示さず、指折數へて十一歳の折に、叔父の家も又々樂々と暮す事も出来なくて、叔父は故郷を去つて江戸に出られる事になつたので、翁はなくく長南の家に歸つて見たものゝ、父も矢張出京して家には居らなだから、この頑是なき子は、全く孤獨の身である、他に親戚が無いてもなかつたが、何れを見ても、僅に其日ぐらしの家のみにて、心細き家計をたて居るに過ぎず、誰一人として引き取つて育てんといふ者も無ければ、いよく今は心を決して、頼み甲斐なき人の世に、命を支へるたつきにと、辛うじて自ら食を求め、冬の寒さを物ともせず、山林に分け入り、

叔父にも
捨てらる

十一歳で
自活

枯木の枝を手折り來ては、これを焚いて暖を取るなど、世にも稀なる辛苦を、僅か十一歳の少年の身に嘗めた、自然の手は如何にも残酷過ぎるやうではあるが、是が又他年奮闘努力比類なき偉人をこの世に送り出すべき試鍊であつたとしたならば、又自然の恵みの、寧ろ却つて如何にも有り難いやうな心地もせられる。

かくてこの試鍊は、約二年間續いた、その内に父も、叔父も、共に江戸より故郷に歸られた、茲に漸くこの憐なる雛鳥は、暖かき慈父の翼の下にはぐくまれる身となつたが、この時始めて寺小屋に入り、讀書習字算術の三科を學修した。

其内安政六年四月三日、田舎に居ても何等成功の見込もないとの考から、叔父に伴はれ、奮然上京の途に就いた、着京後は

奮つて出
京

先づ日本橋區小網町一丁目越後屋善平方に宿を定め、此處彼處と屋敷奉公の口を求めたが、この頃の江戸の有様では、扶持、小遣、仕着せの三つの内、一つか二つは自辨しなくては、小僧にも使用してくれる口などはないのでした、然るに三つとも何も持たないのだから容易に奉公口の見つかる筈もなく、兩人旅宿の費用は次第にかさむばかり、何の手が、りも無くて、煩悶に煩悶を重ねつゝあつた、頃は都の花盛り、今日は上野に日を暮し、明日は淺草飛鳥山と、心々に向島にあこがるゝ浮き世の人々の有様を何と眺めたであらうか、二人にてあせりにあせつた揚句の果、四月十五日日本橋區田所町の仕立屋鳥居清吉方に、八年の年期で住み込むことになつた、偶然にも茲に裁縫を一生の仕事とする運命が定まつた、今の女學生たちの様に、裁縫が

仕立屋奉公

好きで、親から金を貰つて裁縫學校に入學するやうな、のんきな事ではなく、全く使つてくれる所ならば、何でもよいと云ふ態度で、搜しに搜しぬいた最後に、運命の神の手で、裁縫といふ、世にも餘りハデやかでも無い細い仕事をあてがはれたのであつた。

かくて住み込んでから、すぐ裁縫を習ふ事が出来たかといふに、その頃では、何の職業でも、徒弟に住み込んでも、すぐその業務を教へてくれるものではなく、かなり永い間全く牛馬の如く、夏と云はず冬と云はず、外の仕事にこき使はれるのであつた、先づ朝は暗い内からたゞき起され、すぐ飯を焚き、ふき掃除をし、雑用に追ひ廻はされ、夜は遅くまで、休む間もなかつたので、裁縫なんといふ事は、夢にも出来なかつた、が、將

來仕立ものを職とする身が、これではと思つて、使に出た時は道を歩きながら、布を片手に針を片手に持つて、運針の稽古をして歩く、處がそんな事で遅くなると、大目玉を頂戴するのであるから、立ち止まつて道草を喰つてる譯には行かなんだ。朝は御飯を焚きながら、針を運んだのであるが、これも熱心すぎて御飯を焦してもしたならば、一大痛棒を喫はねばならぬのである、今の生徒だちが、やれ運針、それ紵け方など、攻められるのとは、全く雲泥の差であつた、かゝる年月も、早くも三年を過ぎる頃には、一心の程は恐しいもので、普通の仕事はなし得るまでに至つた、この間の事に就いて、小森松風と云ふ人が、翁から聞いた實話に

『朝はいつも暗い中に起き、夜は必ず今の一時に成つて床に就くといふ有様、床に就いても四布蒲團一枚だから、寒くて迎も眠られぬ、爲に冬の内は毎晩寝るに臨み、頭から水をかぶつて、熱心に神信仰をしては床につく事、凡そ八ヶ年でありましたが、殊に最初二三年の苦しみは、今に猶忘れる事が出来ませぬ、云々』

この時代には、何處の家でも、弟子や小僧といふものは、皆こんなものでありました、この間を忍耐し透したものが、一人前となるので、仕事の稽古よりも、忍耐の稽古でした、だから、この時代の人は忍耐の強い事と云つたら、今人の想像も出来ぬ事でしたが、特に翁の如きは、人間以上の力を養ひ得て、他日學校經營の上にも、如何なる艱難に逢つても、ビクともしなかつた所以である、唯々運がよくて、棚から牡丹餅が落ちて來た

やうなものではなかつた、『牡丹餅は棚になし、載せて始めてあり』といふは、この事でありませう。

この頃の事でしたが、或る夏の炎天に木綿反物百反を負はされて、今の人形町から駒込の追分まで行く用がありました。日盛りの事で、實に暑くてたまらないのと、荷物が重いのとで背の皮がすりむけ、そこへ汗がしみ込むので、痛くてたまらないから、お茶の水の元の教育博物館（今の東京博物館）の近傍の薪屋（近頃まで残つて居た）の火の用心水の所で、腰打ちかけて、しばらく休みました、一息入れて再び起たうとする折しも、背の荷物が這つて倒れたまゝ、立つに立たれず、起きるに起きられず、非常に苦んで居る處へ、荷車を引いて來た人があつて、ヤレ小僧が倒れて居るから起してやれ、可愛想にと云つ

て、起してくれました、かく車力に助けられて起き上り、塵を拂つて、荷を負はせられ稍く駒込まで運びましたが、それから車力の恩を忘れず、どこへ行く途でも車力の難儀を見る時には、この事を思ひ出して必ず荷車の後押しをしてやるとの實話であつたさうです、又その後押しをするを見た人もあつたとの事である、このフトした一たびの恩義をも、終生忘れざる精神あつて、初めて人に恩義を酬いられ、生前に銅像を建てられ、死して後まで人々に、神の如く慕はれる所以である。

かゝる中にも、前途に算筆の修業の必要なる事をば考へても、子僧の身の一寸の暇もなく、又月謝も勿論出し様もない、然るにその頃同じ田所町の新道に、手習算盤の師匠があつたが、翁の切なる希望によりて、仕立屋鳥居の主人も、夏は店の暇な時

なれば夏の夜の夜業の無い時だけの學修は許されたもの、當時の學費月謝其外の三百文には困つた、が、窮すれば又相當の考も出るもので、反物の織出しを仕立屋では切りすてたものだ、翁はこのすてる部分を貰ふ事にし、これを五つ繼ぎ足し、襷につくると、時の錢五十文に賣れた、大概月に襷六七本は出來たので、辛うじて三百文の月謝を得てこれで、夜學に通はせてもらつた、然し此織出しの無い事もあつた、かゝる折にはせん方なく、夜學はお休にした、かやうなる不自由な中に習つた算筆が後には積り方算式の發明となり、今日の専門學校の基礎をもうり上げるに至つた事を考へると、今の學生は勿體ないやうな氣がする、自由は却て人の心を弛緩せしめ、何事をも成し得ぬ事になる、人は不自由艱難に遭はねば、人らしい人にはなれぬ

ものである。

何から何までかやうなジミな考のみ持つ人でも、若い時は又若さの元氣といふものはあつた、これが自然で、實はさうなくてはならぬのである、即ち辛うじて覺えた文字の力は當時の人のよく好んで讀んだ武勇傳などは、矢張り人並々には讀んだものであらうか、又お互の間にも語りあつたものか、丁度その頃は幕府の長州征伐の事があつて、先輩等の間には、幕府の募兵に應じて出征せんとするものもあるを聞いて、翁も青年の血鬪勃として湧き壯心禁ぜんとして禁ずる能はず、腕の肉躍つてやまず、ひそかに一振の刀を買ひ求めて、いで是より征討の軍に投ぜんと、密々計畫中、主人に發見せられ、遂には父の耳にも入れられ、非常なる譴責の下に、壯圖は禁止せられて、天晴れ

友人の如く、今日盛況の如き観る裁縫界の進歩と、革命的進歩と、尙數十年後であらう。

未來の太閤秀吉か加藤清正の夢は、俄然として覺めて仕まつた若しこの計畫にして遂行せられたならば、或は幕末の變には既に大鳥圭介榎本武揚の一部將となり、會津函館の戦に勇名をば顯して、維新戦史の一頁を飾るの人となつたか、或は一發の彈丸はこの偉人を空しく路傍の草葉の影に葬り去り、明治に於ける裁縫界の事は他の何人かが、その役割を演じたかも知れな

だ。
武勇傳の夢は全く覺め果て、さて長南の故郷を願れば、又も憂き世の現實は、夢の如くにはあらずして、生家に於ては兄は早く世を去り亡き人となり、養子を迎へて姉に娶せたが、兩人とも病身にて、素より貧しきに、搗て、加へて、借財も少からず、その儘にして置くならば、家も屋敷も失せ果て、一家も

茲に滅亡せんとする悲惨の極にあれば、姉に子なきを以て、生家に立ち歸り、家督相續をなすやう、頻りに親兄弟より迫まれるまゝに、打ち捨て置くべき事ならねば、茲にこれを諾して、明治元年の春主人の方は、約束の八年の年季の外に禮奉公をも濟まして、一先故郷長南の家に歸り、一家を支へる支柱とはなりました。

明治元年四月には、江戸仕込の仕立屋といふ評判の下に、近傍の女子供を集めて、裁縫を教授し、傍ら仕立もの、看板を掲げて、注文に應ぜられしに忽ち好評遠近に立ち廣がるを機會に田舎には極めて目新しき洋服裁縫の引札を配られた爲め、折から維新勿々の事とて、一方頑固極まるもの、間には、又極めて突飛なる新しがり屋も顯はれて、田舎の俄紳士連の洋服注文は、

結婚

實に盛んなるものであつた、特に此時は幕府敗れて、長南の町へは薩長土及加州藩の人々も、幕兵掃蕩のために入り込み、或時は柳原侍従なども來られ、江戸にも珍らしき洋服屋と云ふので、業務は大繁昌であつた、又此頃には井上河内守、遠州濱松より國替となり、この土地に來られ、その仕立物は盡く引き受けられて、自らこれを成す有様であつたから、流石にこれまで悲惨を極めた渡邊の家門も、茲に洋々たる春の光の射しこむ事になつた。

かくて明治元年は世情の騒々しい裏に月日を送り去り、茲に新玉の年立ちて、明治は二年となり、四月二十八日には同町の藍野友右衛門の二女邦子刀自（嘉永三年八月生）を迎へて、めでく結婚の式を挙げられた、この新夫人が夫の感化の力もあらうし、持つて生れた天性でもあらう、世に多く聞えては居らぬが、創立者には極めて應はしき内助の功のあつた方であつた、（後章に別に述べる事とする）。

兩人の間には一男六女を設けられた。

長女千代子畫家帝室技藝員熊谷直彦翁の相續人駒之助君に

嫁したが今は夫妻とも歿した。

次女げん子通稱かをる先生といふ現存する。

三女さと子幼にして歿した。

長男滋君現在の校長。

四女銀子東北帝國大學教授畑井新喜司君の夫人として現存

五女千恵子早世した。

六女靜枝子神戸の杉山君に嫁したが亦既に歿した。

子女
畑井君は
米國大學
教授
且つイ
スタテ
ンスト
テイト
於て生
學究
家と
世間的
名高い
で、
帝大
教授

明治五年に學制は頒布せられ、其七年には長南町にも小學校が設置せられたが、その通學生の大部分は男子にして、女子は殆ど入學するものなく、いづれも翁の許に、裁縫の修業にのみ集まる有様なれば、女子の入學を促さんには、翁を小學校の教員に迎へて、學校にて、裁縫をも併せ教授せしむるに如かずとの町役場の人々の考へから、翁は學校よりの依頼に應じて、授業生試補といふ最低き肩書の下に教員となり、裁縫を教授した、ところがこの案、大に成功し、學校大繁昌を極めたから、明治十年には助教に昇進した。

この事を聞き市原郡鶴舞小學校でも同様の企ての下に、裁縫科を置き、翁に教授を依頼したところ、早速これを諾し、隔日に草鞋ばきで、同校へ勤務せられて、名聲噴々といふ姿であつ

た、ところで、事が千葉縣廳から文部省へも聞えたと見えて、翁の始めて作った、圖に依つて裁ち方を教授するその圖が縣廳を経て文部省に提出せられ、夫が後には教育博物館に出陳せられた、その圖が後年震災近い頃、同博物館から拂下げられた反故の中にあつて、某古書籍店の店頭に出たのを、如何なる因縁か、フト予が目にとまつて買ひ受け、學校に献納したが、大正十二年の震災で灰の如くになり、僅に形だけ残つたのは残念である、これが今日の裁ち方圖に依つて裁縫を教授する嚆矢であつたのである。

翁の評判はかく縣内より、中央文部省等にも聞えた程であつたが、當時千葉の女子師範學校の校長は、後年女子高等師範學校長文學博士となり、東洋史で名高い那珂通世先生であつたが、

この圖は南小
學の校長
千葉の名
印と何日
十の何日
かの何日
があつた
千里の馬
伯樂に遇
ふの世に
今は驚馬
は驚馬の
資を持ち
ながら磨

すもかきもけ
せすなき
伯樂なる
か嘆がする
徒輩が翁の
誠實と翁の
力すと翁の
てすと翁の
伯樂は翁の
にあり翁の
高師なる
授となる

年齒尙若く、新進氣鋭の教育家の事として、先生を擧げて女子師範學校裁縫科教授の任に當らしめた、これぞ千里の馬が伯樂に遇つたので、後年驥足を伸す縁と成つた、同校にあつて明治十二年より十四年までの裁縫教授振りは、實に目覺しいものであつた。然るにその伯樂たる那珂先生は東京女子高等師範學校の校長となられたので、龍の雲を得た心地で、明治十四年五月より同校の裁縫教師に採用せられ、夫より十九年までの間將來本邦裁縫界の重鎮となりし矢田部順子(今村)神田順子、竹内豊子其他の人々が教育せられたのである。

明治十九年には師範學校令が改正せられると同時に、閑散の地に置かれた、寧ろこれが他日一大飛躍をなすべき轉機の時代であつたのである。

同年三月六日より本郷東竹町廿五番地(後年の東京裁縫女學校の所在地とは別、少しお茶水に下つて右側京華中學のあつた處)の自宅を以て校舎にあて、茲に女子職業學校を創立せられた、其議に賛成せられたるは那珂通世君、宮川保全君等で、特に斡旋の勞を取り、發起人として賛意を表せられたのは手島精一君、永井久一郎君、服部一三君、小西信八君、鳩山はる子君、佐方鎮子君、竹村ちさ子君、豊田ふよ子君、山川二葉君、後閑菊野君、上野ぎん子君等で、此年八月より神田錦町に移り、又一つ橋に移り、前記の人々と共立の組織であつたから、共立女子職業學校と稱した、翁は固より、その主動者として働き、隨分努力をしたさうであつたが、校舎敷地を宮内省より御下賜を得て、益々隆盛を極むるに至つたのである、翁は同校の創業よ

三六
り廿九年まで十年間はその組織やら教授やらに夜を日について働かれた、従つて一代に二大裁縫學校の創立に従事したので、兩校共に實は同じ人から生れた同胞なのである。

その頃は洋服流行の最初の時代であつたので女子師範學校の仕事を引き受けて之を仕立て、傍ら自宅に於ては、男子洋服專修の生徒五十餘名を集めて、専ら洋服の裁縫を教へ、且注文にも應ぜられしがため、非常に忙しく、夫人はこれを監督した、翁は教授の餘暇、一方女子職業學校に勤務したのであつたが、廿九年には全く共立女子職業學校を離れて、自宅にある、裁縫教授所（創立より其頃までは和洋裁縫傳習所と稱した）の教授に専心盡力せられたから、これより世間に大に認められ、生徒は漸次に増加して、忽ち教室の狹隘を告げるに至つたので三十二

年一月には東竹町三十五番地にあつた、キリスト教會堂跡を買収しこれに新校舍を建築移轉し、茲に新陣容を整へて、爾來内容の改善充實に従事する内明治四十年五月二十六日、この大偉人は腎臓病を以て、順天堂病院の一室に永眠せられたのである。
終焉に先立つてその死期の近きを知るや、現校長を病床に招ぎ、後事一切を事細かに遺言筆記せしめ、親戚知友を招き、告別の辭をのべ、後事を理學博士坪井正五郎君（死去）文學博士那珂通世君（死去）法學博士鹽澤昌貞君（現在相談役早稻田大學維持員）とに托し成すべき一切を了して、その注意深き且勤勉誠實の一生の幕を閉ぢた。

翁は死期迫つた時小池民次さんに告別の詞をのべて、誠心を以て活動すれば、往生が苦勞にならぬものである、僕は微笑し

て死ぬから君の按摩術で僕の脊を撫で、くれ給へ……ア、好い心持だ……」とそれで睡眠に就かれたから、その時は一旦辭し去つた、次に混睡に陥つた時には、顔面には怡樂の相が見えてそのまゝ逝去せられたさうだ。この偉人の一生に就いては尙語るべき數多の事があるが、その中に就いて主要なる幾つかを記さう。

翁を上總の廳南僻陬の地から見出して、これを千葉縣女子師範學校に採用し、東京女子高等師範學校に拔擢したのみならず、終始相談柱であつた、那珂通世博士は翁の葬式の際、その誄辭の内に左の通りに述べられた。

明治十一年ごろの裁縫の教へ方は都も鄙も推しなべて、順序も無く課程も定まらず、仕立屋の仕事場と變りが御座いま

裁縫科
の齊教
の始授
め法

せんでしたが、裁縫科とても多數の生徒を集めて、規則正しく教へられると云ふことは、君の鶴舞小學校での教へ方で明かになりました。

その年千葉師範學校長即ち私（那珂博士）が學校の隣に、女子師範學校を設けまして、裁縫科の教師には、君を鶴舞から御呼び申しました、その女學校は、生徒も若く、教師も未熟で、何事も不行届きでございましたが、裁縫の一科だけは、君の御蔭によつて、慥に天下に秀でたものとなりました、私が東京女子高等師範學校に轉じました後、君の様な才能ある人を、田舎に残し置くことの惜さに、千葉の學校には御氣の毒でしたが、君を東京へ呼び出して、明治十四年五月から官立學校（東京女子高等師範學校）の教師と致しました、それか

らして君の教授法は、四方に赴任する師範卒業生の手に依つて、全国の女學校に廣まりましたことは、どなたも御存じの事でございます（新治曰く、當時はよく分つて居ただが今日では餘りによく普及して、それが常となり、寧ろ知る人が少い位になりました。）

明治十九年の春に罷めさせられました、そのよされた連中が集まりまして、共立女子職業學校を設けました、女子に職業を授けると云ふ趣意は、至極宜しいけれども、實地に手仕事を教へることに熟練した教師は少くて、初はどの仕事も渉々しくは参りませんでした、君の御夫婦の御盡力によつて裁縫科だけは、初めから盛になりました、教授法管理法の行届いた事は、恐くは官立の高等女學校も、女子師範學校も

女子に職
業教授の
始め

及ばなかつたらうと思はれます、今あの學校があつた通りに盛大になりましたのは、實に君の御夫婦の御盡力に基いたのでございます。

翁の事業は、既に其當時に於て人格高き那珂博士に依つて、天下公衆の前にかく陳述せられたのであります、今でこそ裁縫學校は全國に幾つとなく出来ましたが、その中で最大なる二つ（渡邊女學校と共立女子職業學校と）は、共に翁の創業に係るのであります、而して今現在の全國の裁縫學校創立に成功したる人は、直接間接に翁の教へを受け、又はその系統を引いたものの多い事は、注意すべき事實である。

又今日の裁縫教授法といふものは、今でこそ、色々學問に準據した立派なものが出来てきましたが、當時に於ては、那珂博

士の云はれた通り、何處でも仕立屋の仕事場そのままのものであつたのです、それを一齊教授に圖を用ひたり、算式を應用したりする事は全く翁の創始する所であつた、その證據たる、長南小學校から千葉縣を経て文部省に出した掛圖の原本といふべきものは、前述の通り灰の如く成つてしまひましたが、それが無くとも、今尙古い人々の詳知する所であります。

翁は裁縫教授法の恩人たると共に、又手藝教授法の恩人です、早い頃手藝界に名高かつた、伏見藤三郎といふ人の話に、「私は始め造花の教授法に、大へん困りました、僅か三人の生徒を教へるのに一日かゝつても完全に出來なかつたので、非常に迷惑をして居ると、渡邊先生が仰せになるには、この忙しい世の中に於て、勉強するのだから、成るべく年月を短かくして成功す

る様にせねばならぬ、先づ裁縫を教授するには斯くするのだ、と赤糸を以て白布に縫はせて順序を見せて下さいました、私は成程と悟る所があり、先生の裁縫教授法を、宜しく造花に應用すべしと思つて、先づ生徒に、花の實物を示し、其萼、花瓣、雄蕊、雌蕊の各部を説明して、それ〴〵造り方を教へ、最後にこれを集めて一つの花として見せましたら、これが最も生徒に分り易くて、殊に早く技藝を教授し得るやうになりました、それで最初は三人で困つたのが、その後は六七十人の生徒を引き受けても、容易く教授し得るやうになりました、』といはれた、即ち今の手藝の教授法も翁の裁縫教授法が、お手本であつたのです。

那珂博士は翁に對する誄辭の中にその成功を誠實と勤勉との

二つに歸してゐますが、實によく翁を知るの言といふべく、今の世の中では、成功者を目して、多くは山師の當つたものゝやうに思ふが、成程所謂成金ならばイザ知らず本當に針一本から仕上げて、今日の學校の基礎を築き上げたのは、決して山師では出来ません、全く誠實で勤勉の人であつたからです。

翁の誠實は、何れの方面に向つても露はれたのである、翁の従弟松本順一郎君(千葉縣茂原町の人現存)、の祖父は與七とて世話好きの人であつたから、翁の俠氣と正直とを愛して、茂原市場に太物の商賣を開くべきことを勧め(この頃まだ長南小學校に勤めざる時代)明治四五年頃、親戚の間柄でもあつたから、自ら多少の資本をも支出し、一面には、取引先をも周旋して、月六回の市に試みに店を開かせたところ、品物を買ふ客あれば、

翁は必ず其の客に向ひ、「アナタは何にお使用なさるか」を問ひ、さて正直に商ひ、律義一筋に縫ひ方を教へ、又は自ら裁ちて與へなどしたるため、其店大に繁昌したのであつた、これは翁の性格であつた、後に小學校女子師範學校に入りて教員となり、自ら學校を開いて生徒に對するも、常にこの心を以て心とし、卒業の後々の事迄心にとめて誠實に導いたのが、成功の最大原因の一つであつた。又翁は生徒の全國から集つて來たものに對して、宣傳がうまくて集つて來たナとか、自分の技術がよくて集つて來たのだ抔といふ心持ちは、毛頭なかつた様です、只々自分だちのするからいふ仕事をよく知つて來てくれた、有難い人々といふ心に満ちて居たらしく、従つて而した心持ちは、いつもその取扱の上に現れて、あらん限りの丁寧親切をもつて

し、如何なる劣等生に對しても、ア、面倒だといふやうな感じを、少しも持つたらしい形跡もなかつた、小池民次さんの話に『翁は縫ひ方裁ち方などに就いて、同じことを忘れて、二度も三度も質問するものがあれば、幾度でも初めてと同じやうに説明して聞かせる、『何度でも質問する位のもは頼もしい、分つた振りをしてごまかすのがいけない』と云はれた、とある翁は非常の誠實と勤勉からかゝる大業を仕上げて、曾つてそれを自己の努力の結果とは見なかつた、同じく小池民次といふ人が『此のやうな大校舎を建て、帝都に一の壯觀を添へやうといふ事を初めから考へられたか』と尋ねたれば、『イヤ、そのやうな積りは無かつたが、斯くなつたのは知友諸君の賜で運がよいのである』といはれたといふ、これまでにするには随分骨

を折りましたとは云はなかつたさうだ、又何時の頃比なりけん従弟松本順一郎君(現在)に語りて曰く『自分が今日あるは、謂はゞ僥倖である、併ながら自分は僥倖に甘んぜず、一層進んで活動すべし、汝は決して僥倖を欲するな、僥倖は何人にも望みて得られるものではない、只一念獨立を願へ云々』とどこまでも奮闘努力を教へられた。同じく小池民次さんの話の内に『先生(渡邊翁)は、職員數十名、生徒常に千人内外なる(生存當時)東京裁縫女学校の校長として立つてゐても、其の職員の一として校長に頭を押へられて居ると感じたものは一人も無い、去りとして一人も校長を輕蔑するものは勿論無い、細大となく、校長の意を承けて快く働くから、校長の意志は全校に徹底した、是は先生に統卒の才が有つたばかりではない、其の感化の然ら

しむる處であつた云々』とある、是は決して小池さんばかりではなく、余が渡邊學校に入つた頃には前校長時代の教員も卒業生も澤山に居り、今でも尙幾分残つて居る、その話は皆同様で、頭から押へられるやうな感じも無く、叱られたためしが無かつた、といつてやりそこなひのある時でも、諄々として物を嚙んで含めるやうにして教へて下さつて、有り難さが身にしみるやうであつた、と云つて居る、又生徒の過失を認めて説諭する場合にも、身を生徒の位置に下して十分の同情を注ぐから、説諭を受けるものが、身に染みて感動したといふ事である。

翁はよく人を世話しましたが、又よく人を見るに非凡の眼識がありましたのみならず、よく慎重に調べて人を識りぬいてから職員にも採用したものだ、古き教員松本順三君の話に『いよ

容易に職
員を異動
せず

く教員に採用せられてから、翁の私の事をよく知つて居られたのには驚きました、而して翁は又松本さんに向つて、『學校に來ていたゞくまでには、あなたの事はよく承知して居りますよ』といはれた、而して採用したら又決して動かさない、翁の死後まで松本さんも二十餘年間、病氣で歩けなくなるまで勤めました、病後も年金を送りました、今の校醫は其の相續者です。』

翁は非常に小心の人であると共に、一面には又大膽なる人であつた、又松本順三君の話に『學校の初めの頃に、一時新聞の包圍攻撃ともいふべき苦境に陥り、傍の見る目も氣の毒な様な事があつた、然るに翁は一向に藻掻いて鋭鋒緩和の運動をするでもなく、取消しを求めるともなく人が『困つた事ですナ』といへば『エ、何事も一時です永い内にはよい事はよい事、悪い事は

小心にし
て大膽

悪い事、する事さへして居れば、必ず分る時が来るものです』とてビクともしないで、平常の小心なる態度に似合はなかつたさうです、果してそれは一時で日本全國そんな事に動かされて、學校の價値を落すやうな事はなかつた、然し後年にも亦かやうな事に遭はぬとも限らぬといつて、十分にその時の覺悟を極めつゝあつたさうである、又翁は世の所謂高利貸が寝ても覺めても金錢より外に考の無いやうなケチ／＼した風を帯びた沒趣味沒常識の人では無かつた、古道具屋の前にも立ち、金魚を飼ひ小鳥を飼ひ、盆栽花卉を愛せられ、頗る趣味豊かな多方面の人であつた、それも流行を追ひ、高價を拂つて道樂にするのではなく、極めて安い縁日のものなどを買ひ、これに巧妙な手を加へて、立派な盆栽に仕立て、これを樂むやうな仕方であつた(晩

多趣味の
人

年にはよく袴を穿いて、本郷の處々の縁日を歩いて居るのを見た人がある)又雞なども飼はれたが雞が病氣などに罹ると、よく剃刀で咽をソツト割き、そこを奇麗に洗つて、巧妙に縫ひ合せてやるなど、全く外科醫にしてみたき程の伎倆であつたさうだ。晩年にその最も樂まれたのは義太夫であつた、といつて自分でかたるのでは無く、好んで寄席に行かれたのである、極めて聞き巧者であつて、本郷の若竹から、淺草の東橋亭あたりまで閑暇毎に出かけられた、日曜日には晝席にも行かれた事もあつた、然し其間でも決して仕事の方を抛擲するのではなく、生徒の試験の答案を携へ行き、間々にはこれを點檢し、又雑誌の原稿などを書かれる事もあつたのである、けれども酒と煙草とは壯年の時よりこれを嗜まず『如何に慎み深い人でも酒の爲には、

血氣の勇に驅られて我知らず粗暴の行動をも仕出し、平素の交際を破り、竟には大事なる生命にも關するものなれば、拙者は飲まぬ』とて斷然飲まなかつたさうである。

翁は裁縫に就いて巧妙な伎倆を有して居た事は、當時有名な事であつたが、私も學校に就職してから、いろ／＼の人に就いて話を聞いて、實に感心しました、古い女教員で高橋なをと云ふ人がありました（今は教育界を退きました）がこの人が在職中に私が聞いた話ですが、高橋さんがまた生徒の時に、先生（渡邊辰五郎翁）がよく教室を回つて時々のお話に『裁縫は熟練してしまへば、目をつぶつても出来るものです』と云はれましたが、マサカと思つて居ました、然るに或る時先生が教壇上から、例の目をつぶつても話が出ましたので、先生が又おつしやる

ナと思つて居ると、壇の前の机にあつた布と針とを両手に取り上げて、かうするんですと、目をつぶつて、如何にも迅速に何かお縫ひになりましたアツケにとられて見て居ると、先生がそれを開いて衆生にお示しになると、丸でありました、丸は印しをつけて見て縫つても、縫ひ悪いものなのですのに、目をつぶつて、特に迅速（先生は常から運針の特に早い人でした）に縫ひあげられた丸を見ては、衆生徒悉く感歎しまして、全く裁縫の神様だと思ひました』と語られました、その外にも是に類する話は幾つも残つて居ます。

翁は熱心な工夫の力の強い人でした、彼の雛尺と稱する一種の縮尺などもこの工夫の一例ですが、裁物を圖に依つて教授するにしても、これを一々實物で裁たせることは不可能です、又

紙で裁たせるにしても、反物の實物大では、扱ひ悪いし、又實物の二分の一三分の一とした處で、それも實物の寸法と、二重に記憶したり、計つたりせねばならず、計算にうとい女子に取つては、實に困難な事である、依つて工夫の力の強い翁は遂に、當時の半紙を反物と見なし、半紙一枚で一ツ身一枚、半紙三枚で三ツ身、半紙四枚で四ツ身一枚、六枚で大人物一枚を作るべきやうそれに相當する縮尺（鯨尺一尺を三寸五分としたもの）を考案して、雛型尺として、その尺で二分するも三分するもななく一尺幅ならば一尺、一尺四寸の長さならば、そのまま一尺四寸として半紙を裁つて行つて着物になるので、實際の扱ひに便利極まるものが出來た、この發明は長南小學校の時代で、翁が自分で、竹を切つて來て、鑪で目を切ると奥さんがこれに墨を

入れて、出來たのは、勿論賣るではなく、生徒にこれを使はせたものです、これが全國に廣がつて、裁縫教授を益した事は實に大きなものである、後年度量衡の制度がやかましくなつて、私尺使用は罷りならぬと云ふ事になつた時も、翁は農商務省に何回ともなく足を運んで、諄々とその利便を説明したので、役所でも遂にこれを諒解して、物品の賣買に使用せずして、單に學校の教授にのみ使用するは、差支ない事とした、後には一種の縮尺と認めて檢定するに至つて、今日にも用ひられて居る、が、大凡、今日まで、一私人の創制の尺度にして、公證檢定せられ、公に使用せらるゝものは、翁の雛型尺を措いては外にはありません、然るに少しづつ、學問をした素人が、裁縫界に首を入れてから、幼い子供の長さの觀念を攪亂せしめるから、宜し

くない、使用せぬがよいと云ふ議論が行はれるに至つた（幼い子に人形を持たせると、人の大きさの觀念を攪亂せしめるからならぬとか、馬の玩具を持たせると、馬の大きさの觀念を攪亂せしめるから罷りならぬ杯といふ議論も出るであらう）、然しまだそれに優るものは發明されぬ、それにもかゝらず、よく人のよい事をしたのは、破壊したがる世の中である、如何に破壊し盡しても、明治の裁縫界に利便を與へた効果は決して没却する事は出来ぬ。

翁は單なる舊式の服裝を固守せんとする守舊家ではなかつた、現在の服裝特に女子の服裝を改良せんことは最早く注目したのであつた。

翁の改良服の考案を起したのは明治十五年頃であつた、その

二十年頃には、朝野にその説盛に起り、翁は同志の人、元田直、巖本善治、山田美妙齊氏等と佐々木豊治氏方に會合して、種々討議せられた事もあつて、三十一年には婦人改良服指南の一書をも著すに至つた、改良服に就いては、議論の人は随分多かつたが、多くは口の人、筆の人で、手の人は無かつた、弘田醫學博士など醫學上の見地より頻りにその説を唱へられたが、翁に乞うて、試に之を仕立てくれとの事であつたから、翁はその依頼に應じて、實物數種を仕立て、示された、當時その影響は可なり大きいものであつて、朝鮮の趙重應氏など、わざ／＼翁を訪問して種々服裝談を聞き、大に悦びて曰く、冀くは日本婦人に止まらず、宜しくこの改良服を、東洋婦人一般に着用せしめられたしとて切望すると共に、歸るに際し、當時の朝鮮婦

人の改良股引を寄贈せられたといふ事であつた、今日婦女子一般に用ひられる吾妻コートといふものも、最初は翁の考案になつたもの、又女子の行燈袴も勿論その創制であつた、その以前は女子高等師範学校の生徒など矢張男袴の通りのものを着用したので、今日にもそんな寫眞が残つて居る、然し時代がたつと妙なもので、何々はどここの學校で考案したのだの、誰が工夫したのだ抔といふ説が續出して、分らなくなつて來るのである。

その頃より一般がモ少し眞面目に衣服改良に就いて研究もし實行もしたらば、我が邦の服装界は、決して今日の混沌たる状態では、なかつたらうに、今となつては、徒らに新奇なる洋服論にのみ心を奪はれて、遂に尙未向ふ針路を見出さざるは遺憾千萬である、翁に對して恥づべき次第ではないか。

襦型

我邦の衣服は單純なる防寒用のものでなく、藝術品としての一面を備へたものであるだけに、襦などといふものがあつて、衣服に美觀を添へて居る、従つてその製作に苦心と時間とを要することは周知の事であるが、翁は早くよりこれに着目して所謂袖形襦型を拵へた、今日では色々の材料を用ひ、又數多の型が出来て、裁縫に如何に利便を與へて居るか知れぬが、全く翁の創作によるものであることを忘れてはならぬ。(尤その意味を書いたものは古くあるにはあつたやうだ)。

翁に雛尺、襦型など色々の創案のある事は前記の通りであるが、裁縫に掛圖を用ひて一齊教授を始めたのは全く翁の創意である、これは明治七年頃から十年までの間である、而して十年には既に大きな裁縫掛圖の刊行までしたのだ、それが大正十二

年の震災までは、學校の物置きの間などに、ボロ／＼ながらあつたが、惜しいかな焼けてしまつた。

これが基礎になつて裁縫書が出来たのが明治十三年であつた、十三年の裁縫書は、今でもタマに見ることがある、然し極少い、殆同時に裁縫算術書が出来た、この兩書が全國の裁縫界を益した事は、實に莫大なるものであつて、世の中に裁縫の術を書物に依つて知らせる根元を開いたものである。その頃裁縫書を創作する事は非凡な人にして始めて出来得る事であつた、今から見ると、何でも無ささうだが、決してさうではない、今日になつて昔にも裁縫書がありさうなものぞと思つて、調べて見ると、成る程有つた、頗る舊い時代からあつた、余の知る限りでは、普通服の裁縫書は極古く溯ると元祿八年の頃のものまである、

餘はあつても「萬金産業袋」などの書に、裁ち方圖などが少し計載つて居ると、群書類従にある、装束寸法抄などであるが、何れも特種のものであつて、普通のものではない、然らば翁はかやうな普通服裁縫書のある事を知つて、これを参考したかといふに、決してさうではなかつた、若しさうであつたならば、翁に非常の苦心をかけなかつたのであらうが、翁は學問の人ではなかつたから、世に珍らしき裁縫書などのあるのを、捜し出して参考する事などはせなんだ、その證據には、余が捜し出した古い裁縫書と、翁の創作したものと細かく對照して見ると、何等聯絡關係もない、見たとしたらば、翁の決して見逃すべからざるところを、創作に取つてない、これ全く一見した事もなく、すべてが、小學校の『糸、犬、碇』などといふその頃の

單語の掛圖、などからヒントを得たに過ぎないで、考案創作したものであることが窺はれる、従つてその苦心たる並大抵の事ではなかつたのである、この時は長南町の長圓寺の本堂の脇の八疊の間を借りて、そこで編輯しました、それが文筆のある人がするならば、裁縫書など譯もなささうであるが、翁としては一通りの苦心ではなかつたのだ、長圓寺の間借りの前にも内に居て、チヨイ／＼研究してみました、机に向つて考へこんで居る中には、奥さんが何を云つても、口をきかなくてよわつた事がありました、と云つて居られた、かくして出來たのが最初の裁縫書と算術書とである。

この裁縫に算術を應用する事は非常な進歩であります、それ以前は只反物を計つて、胸算用や折り疊んでやつたものを、算

式を用ひたのは、今に成つては當然さうありさうな事だが、實は容易の事ではない、すべての學問でも數學を用ひる様になると學問らしい形になると云ふが、この裁縫も算式を入れるに至つて、初めて一つの學校の教科らしく成つたのだ、これは一寸した事のやうで、なか／＼の大功績である、専門の裁縫算術書を著したに至つては、何たる卓見で、且何たる頭のよい事であつたらうよ、それから見ると、その後の裁縫の進歩の遅れたる事、翁に對して面目も無い次第である、明治三十年の裁縫書が最よく世に出たが十三年のは知らぬ人も多くある、次に翁は自分が讀書算筆に就いて苦辛慘憺たるものがあつただけに、裁縫書の民衆化といふ事には、餘程の苦心をせられて居る、それは明治十五年に『たちぬひのをしへ』といふ全文假名書きの裁縫

書を出されて居るので分る、翁の後年までの益友に小西信八翁などといふ、假名書きの熱心家もあつた事故、其益を受けられたものであらうが、この時代に於いて、裁縫書を作られても、算術を入れても、それが文筆の人へのみ益するのではならぬと考へてその民衆化に勉められた事は卓見といふべきである。

翁は極めて同情の強い人でありました、人と交るに同情を以てし、人を導くに同情を以てした事は、翁を知る人の、異口同音に唱へる所である、劣等生でもこれを教へるには身を本人の位置に置いて、懇々くりかへしくて教へられた、過つたる事のあるに對しても其の境遇に就いて、最も深い同情の發露よりして、細々と教を垂れられた、従つて人が決して反感を懷く事なく、盡く感化して過ちを改めるに至つたのである、翁の同情

に富み慈悲の心の深かつた事は、若い時の苦辛と性來の然らしむる處であつたらう、その逝かれる二十餘日前の左の事でも知られる、フト瘦せ衰へたる紙屑買ひの老翁の來たのを見て、お前さんは何歳かと尋ねたれば、六十二歳です、と答へた、然るに見た處ではフケて六十五六とも見える、誠に氣の毒なことであるとして、食物やいろくゝの細かなる注意を述べ與へられた、後にア、私の身は彼より二歳上で、達者なことは心強いと云はれたが、實にそれより二十日餘り後には、發病せられたのであつた、私が明治四十三年末學校に就職した頃に、小使に常爺や(小澤)といふのが居た、本人の話を聞くと、元神奈川縣の出で、若い頃には随分暴れ者でした、日清戦役の當時などには、軍役人夫として戦地などにも押し渡り、随分手荒い事ばかりして居

たものだが後本郷に人力車夫をして居た時、屢々翁の車を引いて歩く内、遂に翁の引立てを受けて、學校最初の頃の小使となり、遂に亂暴な性質も折れて、全く従順な小使となり、老後の一生を送り、其子小澤平太郎は寄宿舎の賄として一代を送り現存、三代小澤鶴次郎は學校の校内賣店を開いて居る、常爺やも長命して現存して居る、この爺や前校長の話となると、全く態度を改めて、勢こんて話すこと、宗教の信仰者が、神佛に對するに異ならず、如何に翁の感化の力の強かつたかを想像すべく、決して只の人使の上手などといふ、表面的のものではなく、人を使ふに誠心誠意から出たものであつた事が知られる、大概の人が外面から見て、人使ひの上手な人であつたと見えるといふが、余は決して上手や下手の問題ではなく、誠意の致す所で

あつたと思ふ、これが生存中に銅像の出來た所以である。

銅像の建
立

銅像といへば今では誰も彼も少し何かすると建立するので、到る所にあるが、三十七八年頃にはまだ珍しい事であつた、武勳赫々たるものか、政治上の名聲隆々たるものでなくては、銅像などと云ふものは無かつた、それも生前には曾て例の無い事である、翁のは、その生前而かも女ばかりで男の手を借らず、況して権力者の紹介狀一つを借るでもなく、全く門下の出身女學生の手のみで、翁の還暦の祝のためにとて建設したもので、明治三十八年三月に成つた等身のものである、十二年の震災後は今の校地に移してあるが、よく偉人の風采を偲ぶべきものである。

奥さんの
内助

前に一寸云つて置いた奥さんの事ですが、翁の盛名の蔭にか

くれて、世に聞えて居りませんが、その内助の功たるなか／＼大したものである、結婚當時の家業は呉服、箆筒、火鉢、膳、椀、などを賣る傍、仕立屋をして居たのだが、明治七年初めて翁が長南町の小學校へ出てからは、宅へ來る生徒は全く奥さんが家業と共に引き受けて教へたものです、十一年に千葉の女子師範に出てからは、奥さんが一人て留守して、實家の父と母とが交る／＼に泊りに來たやうな譯でしたが、兩親も『主人の留守中は、成るべく儉約して、出來るだけお錢を残す様にせよ』といふので、その三年間には随分に錢をためたさうでしたが、翁の月給が少くて千葉で貰ふだけでは教員としての生活を維持するにはどうしても自炊して居ても足らず、月々宅の方から持ち出しをしたのだが、素より月給を望んで行つたわけではない

が、偶々貳圓參圓持つて歸ると思ふと、又五圓十圓なり持つて行くので内々實に困つたさうでした、而して試験の調べが忙しくなると、奥さんも手傳に千葉へ行つた事も年に一度位はあつたさうです、而してこの奥さんには、人の氣の付かない經濟思想がある人でした、或る年郷里で某店の番頭四人が失策する所を翁が自分で引受けてやつて、家にあるだけの金錢を全部出してしまつてもまだ五十圓の金が不足になるので、翁は自分の借用證文にしておくといふと、奥さんはそれよりは一時に返した方がよいから『あなたも衣服をお賣りなされ、私も賣りますから』とすゝめて、二人が衣服を賣る事になりました、時に翁は一重ねと羽織とを賣り、奥さんは一重ねと丸帶とを賣つて、漸く五十餘圓の金が出来、それで全部返済してしまつた事がある

と、後年奥さんの直話であつたさうです、これは人を救はんが爲めに、女が先に立つて、着物を賣るといふ考は一寸出ない事、又實行出来ない事であつた、この人を救ふと云ふ心と、この經濟觀とは始終翁の蔭に働いたものです、これを人知れぬ内助の功といふのである。

後年學校の方がまだ全部事務を人の手に委せざる頃には奥さんが會計をして居られたさうです、而して學校の方が世話が無くなつてからも何くれと細かい事まで注意して居られた、生徒が綿屑や糸屑を落してよく粗末にしがちなものであるがこれもよく始末するやう注意せられたけれど、それでも尙散つて居るのを『アー勿體ない〜』といつて入念に拾ひ集めて、ためて置いて継ぎ合せて織つて、布團に拵へたのが、余が就職以後に

塵積んで
山となる

も尙渡邊家に残つてあつた、この心掛けが、則ち大きな學校の建設の基礎に、與つて力ある事をものがたるものであると、余はつくづく考へた、決して一寸うまい工夫一つ位で、あの一大専門學校が出来るものではない。

而して最後に述べたいのは、この一大偉人に學んだ人々が、何時とはなしに感化を受けたものと見えて、日本全國に裁縫學校を開いたものゝ多い事又成功したものゝ多い事は、これは今更事新しく申すまでもなく、天下周知の事實であります、私の筆の先よりも口の先よりも事實がこれを證明します、事實の證明より確實なものはありません。(昭和三年十月二十二日記)

附録 裁縫は造人の術なり。

七二

左の一編は病中家人に口授筆記せしめ雑誌『裁縫と家事』に掲載したものであるが、今本書の出版に際してこれを採録したのは本書の成るはこの趣旨に出たものである事を明かにするに足るからである。

裁縫は造衣の術である事は、大體に於て異論はないが、唯それだけとしたならば、長年の月日をかけて、多大の勞力を費して學習する事は、如何にも惜しい様な氣がする、今少し簡単に片付ける方法も考へなくてはなるまい、又男子の中學の様に、むしろ裁縫はぬきにしてしまつて、大體の學科を中學と同様にし、中學卒業生の力と高女卒業生の力とを同程度にするか、或は男女同一課程の中學に男女共學にするか、そうして卒業後女

子に造衣の術の必要な人だけ、一年ばかりも、別に裁縫を學校で習ふか、仕立屋で習ふかすれば澤山ではないか、さうして造衣の術を必要でないとする人は、之を習はずに、着物は一切専門の仕立屋に縫はせる事にしてしまつて、各家庭で裁縫は一切せぬ事とし、裁縫の代りに他の仕事に十分の力を入れ、裁縫は裁縫職業の人を雇ひ入れてなさしめるか、家庭外の専門の仕立屋に渡してするか、此の方がむしろ便宜ではあるまいか、此の方が今後の學校と家庭と社會との三方面から、自然とそう云ふ風の傾向となつて行くのではなからうか、かうなつて行くと、今日の所謂裁縫家の金科玉條とする『裁縫は日本婦人の天職なり』と云ふ常套語も、そろ／＼根本がぐらつき出しはしないか、こゝに於てか余は考へるに裁縫は、そんな單純な且つ輕易な物

七三

てはなくて、實に／＼重い／＼使命を持つたものである、即ち裁縫は造衣の術なると共に『造人の術である』と云ふのである、人間の人格を作り上げて行くのに修身科の老先生などが教壇に立ちて、目鏡越に教科書を眺めながら、莊重なる句調を以て諸々の徳目を一週間に一時間位並べ説いて、時間の終ると共に丁寧にお辭儀をして引込んでしまつて、出来るものではありませんまい、學校に於ては最も人格の高い裁縫の教員が、一週間中なるべく多くの時間を取り、その時間中修身教科書の通り一遍の講義こそせざれ、一舉手一投足より、糸針の扱ひ方に至るまで、人格の發露たる生きた模範を示し、人格の發露たる一言一語、其人其人の口より、その心琴にふれて、之をうつし、又一方生徒の裁縫の仕方として現れたる、一舉手一投足の大小より、糸針

を扱ふ指先の細に至るまで、その改むべきものは、一々指導して之を改めしめ、又更に裁縫材料に對する經濟的の節約利用の方法を教へる心の持ち方と、實例とを示すと共に、之を實演せしめ、技術を教へる事が、即ち完全なる人格を切實にうつす事となる、これが裁縫科である、之をもつて見れば裁縫は人格を作り上げる、最も有要な學科で、之をさしおいて他の何學科によつて、之より以上の効果を收めんとするか、他の學科にもそれ相當の効果はあらうが、此の裁縫科にまさる程のものがただ一つでもあり得ようか、造衣の技術が有要不要の問題は、第二とし第三とし、先づ以つて人格高き教師その人の人格を生徒にうつす事に於て、裁縫科をさし置いて、他に何物も有得ない、こゝに於てか裁縫科の教員は、全校中の最上の位置をしめたる、

最も人格高き人でなくてはならぬ、校長は勿論事務職員の最高者で全校の統督者で、尊敬すべきは勿論であるが、其人よりしてもあごで使はれる様な低き人であつてはならぬ、かゝる立派な人格ある裁縫教員が、如何にして出來得べきか、勿論裁縫學校より出てざるべからず、かく論じて來ると、裁縫學校の使命たるや、教育事業中に於て、最も重要な位置をしめるものでなくてはならぬ、即ち裁縫學校に入學し得るに於て、その學業成績よりも、身體よりも、技術よりも、最も人格の高きものを選ばなくてはならぬ、たとへ學科の成績が最優等でも體格が良くとも入學試験に一番の成績でも、人格の點に於て多少の欠點でもあるならば、之は裁縫學校生徒たる資格は無いものとすべし、全國に於て、裁縫學校の生徒と云へは單にそれだけで

人格の高きものと云ふ考を、全般の人より持たられる様な生徒でなくてはならぬ、かくしてその教育の任に當るものは、勿論智識技能を備ふるだけの職員でなく、最良なる人格を有するものでなくてはならぬ、裁縫學校即ち德育學校で、合せて技術を授ける學校と云ふ意味でなくてはならぬ、結婚等の條件に於ても、單に裁縫學校に入學したりといふのみを以て、その人格は尋ぬるに及ばずと云ふ位でなくてはならぬ、之が卒業生たり、又裁縫教師たりと云ふに於ては、智識技能健康等に於ては兎も角、人格に於ては、少しの非難もなく、衆人の模範と仰がれるものでなくてはならぬ、裁縫科にかゝる重要な使命を持たせる事は、これから新に始める事であらうかと云ふに、何も新奇の事でも何でもない、古來我が國の教育には、一部にさう云ふ

様な事が行はれたのであつた、たとへば昔の寺小屋教育に於て、今の學校の様に、教育を職業的に賣物にした寺小屋商賣のものも、大分有つたが、又一部分には、寺の住職が宗教的の勤のかたはら、讀書習字その物よりも、生徒の品性その物を喧ましく云つたものが、かなり多かつた、こんな所では、父兄もその品性學問に、且社會的地位に於ても、師匠たるお坊さんに對しては、今日の様に、反抗の氣分等は毛頭なく、師匠の人格は直ちに弟子の人格にうつつた、寺小屋も職業的のものは、今の授業料の様に、謝禮を受けたものは、さうはいかなかつた、寺の外に名主が、事務の傍、又は醫者が診療の傍、讀書習字を教へたのなどは、稍同じ趣で有つた。

裁縫も手習と同様、行儀作法を仕込むのが主で、技藝を第二

とする趣が有つた、即ち物固い母が、ひざもとに置いて、種々の教訓をしながら技藝を教へた、又其頃には、自宅では我儘が出るからとて、子を換へて教へる法もあつた、殊に親類中が一番物固い老人の人格の高い所へは、多くの親類縁者から娘の子を頼んで、仕込んで貰つた、勿論名は裁縫のおけいこであつたが、實は人格の教養であつた、此の際近間に、技術の遙に勝れた裁縫師が有つても、其處には依頼しなかつた、是をもつて見ると其の頃には、裁縫のおけいこ云ふのは名義だけであつて、第二の物で、主として人格の教養が第一であつた、其の頃にも技術本位で報酬を主とする針子屋もあつて、寺小屋のそれと同様で有つた、然しそれは針子の行儀作法もおかまひなしで、師匠の權威もなく、自由勝手な物で有つた、其の内にはよろし

からざる風儀習慣も出来、心有る者は、そんな場所へは大切な娘をやる事が出来ないといつて、やらなかつた物だ、然るに小學校が出来て寺小屋から其教育事業を取上げたのは、悪風俗不良習慣より引離した點に於て、甚だ結構であつた、大成功であつた、所が一方技術本位に走り、品性陶冶の仕事は全然忘れられ、裁縫教師は學校中で地位の低い者、品性の高尚ならぬものも採用され、たゞ仕立屋と同様に立派に着物を仕立て得る者が良教師として用ひられ、品性高き母、人格の高尚なる老母、若くは親類中に重きを成す祖母の代りとなつて、親類中の娘を躰ける様な仕事は、全く見る事が出来なく成り、裁縫は他の諸學科を教授するひまに、學校の片隅で、洗濯婆さんか、仕立屋で習つた人が、小さく成つて教師の間に、何等の先生顔も出来な

いで、こそく〜と授業をして居る有様に成り、裁縫科の權威無き事、おびたゞしい物に成つた、たゞ實用上から、『裁縫は日本婦人の天職だ』等と誰が言ひ出したか知らないが、あつぱれ名文句を考へて、自ら慰めて居るに過ぎない事となつた。自らはそれで良いとしても、他からは低く見られる事は、何時迄立つても同様である、之を根本から改革して、昔の精神に引戻し、娘を人格高き者に仕込む爲めの、一つの手段として、裁縫と云ふ仕事を用ひたと云ふ、本來の精神に立戻り、技術を第二に置き、品性を第一に置くに至つて始めて裁縫の地位も高まり、裁縫科本來の使命も全うせられる事と思ふ、裁縫科を斯く生かして用ふる事が、又教育本來の精神にかなふものであると信ずる、覺めよ裁縫界の人々、覺めよ教育界の人々よ。

裁縫造人の實例、

裁縫は單なる衣服を造る術ではなく、實は高き人格を被教育者に移す術である事は、前回に繰返し述べた通りであるが、これが余の病床にある空想であつて、これが病氣のせいであるかも知れぬから、健全な腦や精神を持たれる方の御精讀御批評を煩はしたいのです。

若しこれが病氣の發作の一つであつたらば、二十年の裁縫界の生活は、一場の夢であつたとして、もはや奇麗さつぱりと取消して、心残らず一掃して、行く所へ行きます。然しまだ私には夢とのみ思はれぬのです、何となれば、余には左の如き事實が、頭の中に見えたり、聞えたりしてならぬのです。則ち渡邊女學校出身の満田ユイ姉が鹿兒島に女子技藝學校を開いて居り

ます、大分には岩田英姉が、岩田女學校を開いて居ります。吳市には土肥もと子姉が土肥高等女學校を開いて居ります。山口縣岩國には隅しづ姉の岩國女子高等技藝學校があります。岐阜には片桐佐々木姉の學校があります。名古屋市の相山正式氏の女學校は一つのみではなく、二つもあるさうです。關東に來ては、佐原の井上花姉の淑徳裁縫女學校高崎市の佐藤種姉 裁縫女學校があります。東北に行くと米澤市の九里とみ姉の女學校仙臺の三島姉の東北女子職業學校がありまして、これ等は皆東京でなくて、地方にあるので、聞える範圍が狭いが、然し地方としては、何れも廣い範圍を占めて、且確乎たる基礎の上に立ち、地方教育上大きな仕事をなしつつあります。其外にも尙學校として形式を備へざるまでも學校と同様の成績を擧げて居る

ものが決して少い事ではありません。若し全國に互つて調べて見たらば、随分大きな仕事をなして居る譯であります。これは事實であります。僻目に見たら、イヤそれ程でもないとか、アノ學校にはかう云ふ缺點があるとか云ひ得るのでせうが、政府が國財を費してやつてさへうまく行かないものがあるのですから、そんな細かな事を云ふものには無い。大體に於て盛なのは盛んです。よいのはよいのです。皆私費で始めて國家の仕事の手傳までしたのです。而してかやうな人々の出身が揃ひも揃つて、渡邊女學校で渡邊辰五郎翁の薰陶を受けた人なのであります。名古屋の椋山氏。横濱市の神奈川高等女學校の佐藤君の如きは、多少事情は違ふが、とにかく椋山氏は夫妻とも渡邊氏に師事し、佐藤君の令室は渡邊翁の門下に學んだものであります。

公平に見た所で日本の教育史上にこの事實は抹殺すべからざる事であります。この人々は渡邊學校に在學する時に裁縫學校を創立する時にはかく／＼すべし、經營にはかく／＼せよとか、一々特別に方法を口授せられた譯でも何でも無からうが、實際に渡邊翁の高き人格が自然と移りて學校を起す氣になり、經營に當りてはその師のなすが如く、教育教授にも師のまねをするやうになり、否、師のやうな人格が出来て居るのでワザ／＼でなくも、自然と其の様な仕事となり、各地方に小渡邊が續出したのであります。

以上は學校を起した人を擧げたのですが、學校を起さずに教育に従事して居る人の内にも、翁の感化を受けて、翁の通りの働きをして居る人が多數にあるやうです。これも周知も事實で、

今更改めて申すには及ばぬ事で空想でも何んでもなく事實であります。事實程争はれぬものはありません。余は偶然渡邊翁の遺されたる女學校に老後の二十年を送りまして、以上の事實をよく見ましたり又翁の一生の事もよく聞知して居りますので、針一本の仕事も感化の大なるを、極めてよく詳知して居るものです。前記の薰陶を受けた人々は、私よりは尙よく事實を知つて居られて、深く心に銘してお出の方もありません。従つてこの上の悉しい事實は夫等の人々から聞かれたらば一層たしかで、且詳細に分る事と信じます。而して私の『裁縫が造人の術』と云つた意義が決して病床の上の空想で、病氣のせいであるか無いかがお分りと存じます。

余は永い間渡邊學校生活で、翁の事實を知りたいと思つて調べもしたり、その遺された感化の偉大なるをも知て居ります。而して何れは全體に涉つて是を書いて見たいと思つて居りましたが、今回これを果した譯です。

昭和四年三月二十五日印刷發行

定價金二十五錢

著者 新治吉太郎

發行者 渡邊校友會

代表者 小野ミヰル

印刷者 東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷者 奧山誠造

印刷所 東京市芝區愛宕町三丁目二番地

東洋印刷株式會社



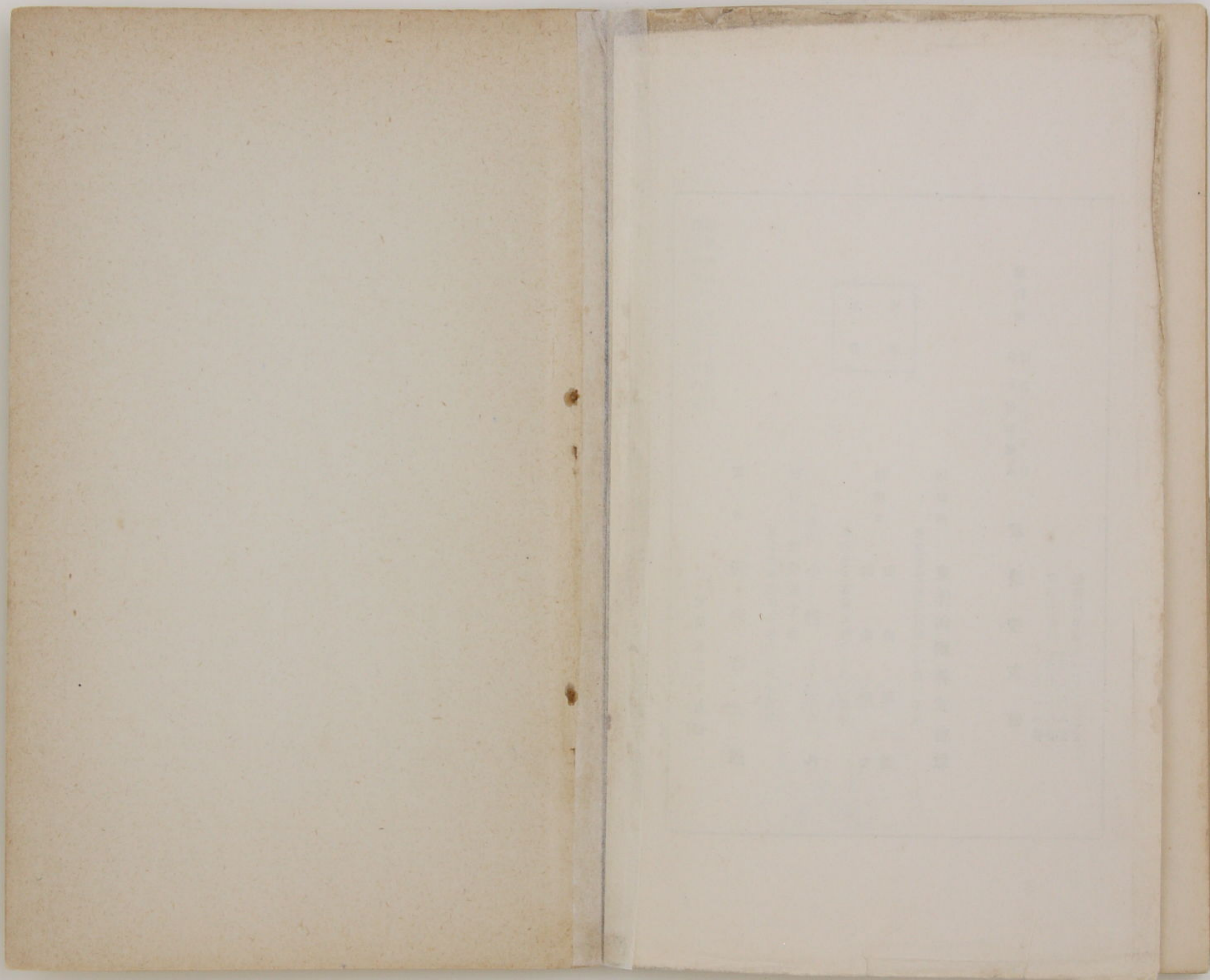
發行所 東京市本郷區湯島六丁目

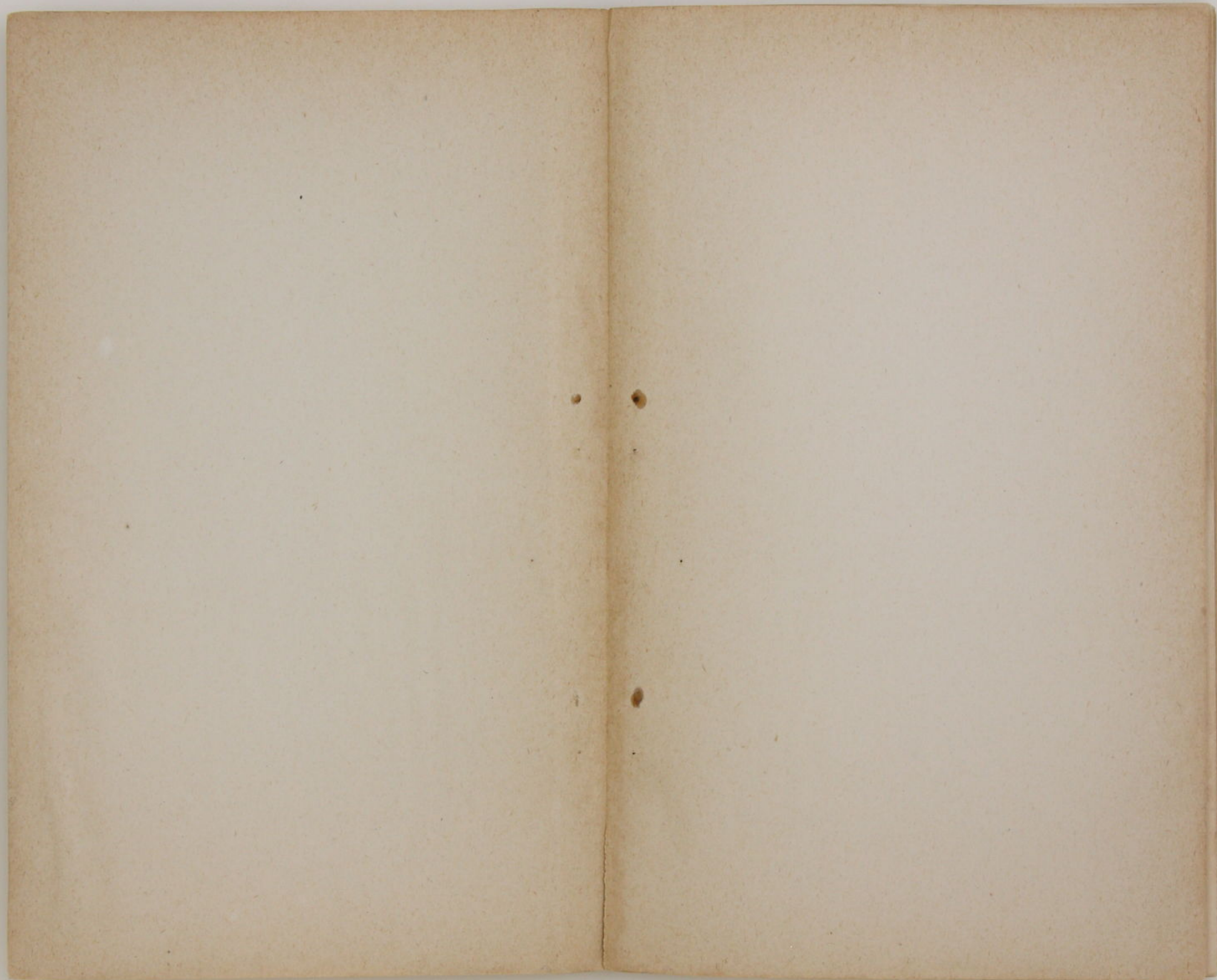
渡邊校友會

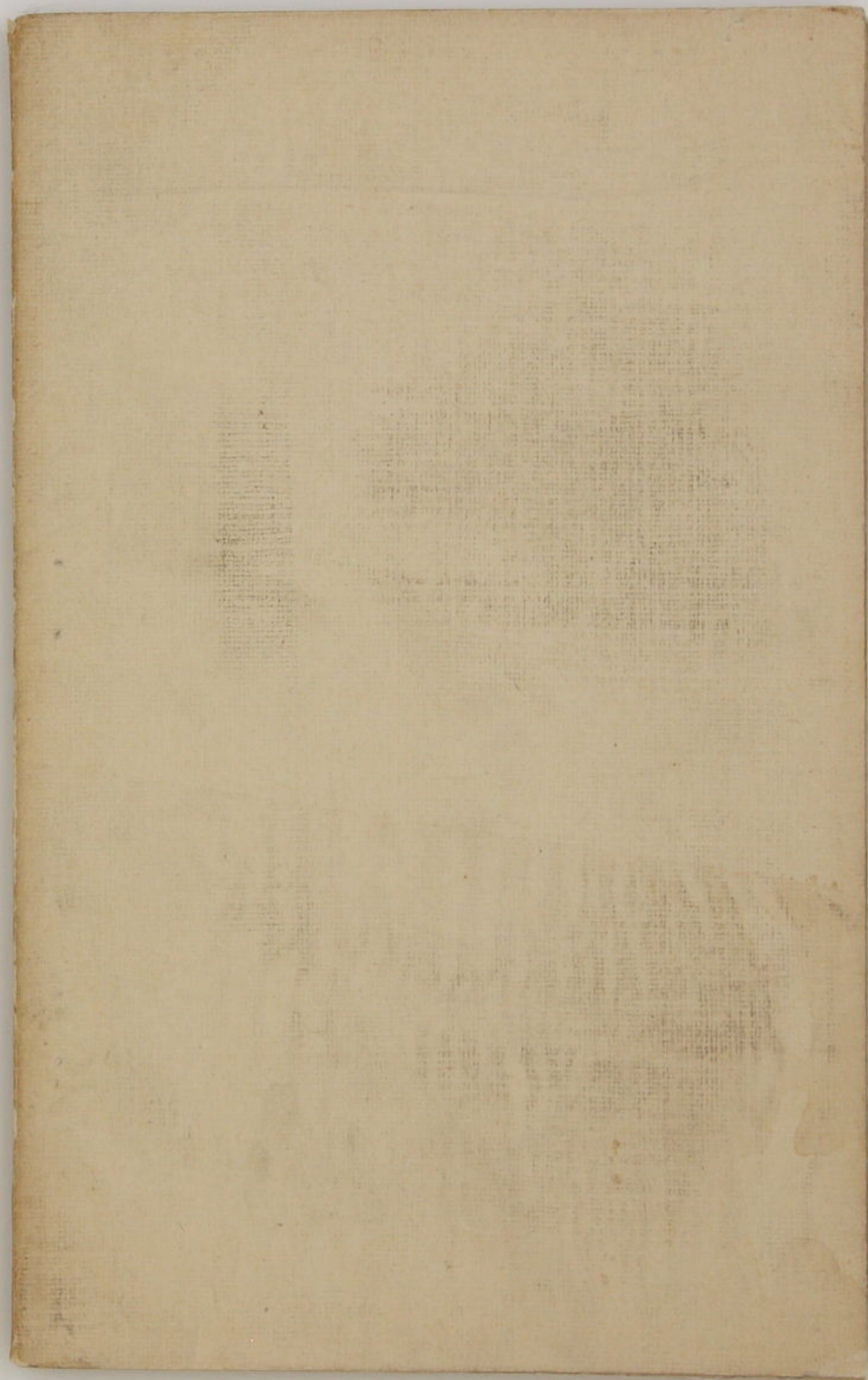
電話小石川 三三三五番
三三六八番
三七六九番
振替口座東京 一二二五番

289
N/2
C36

昭和四年四月 日
資字 772









渡邊辰五郎翁

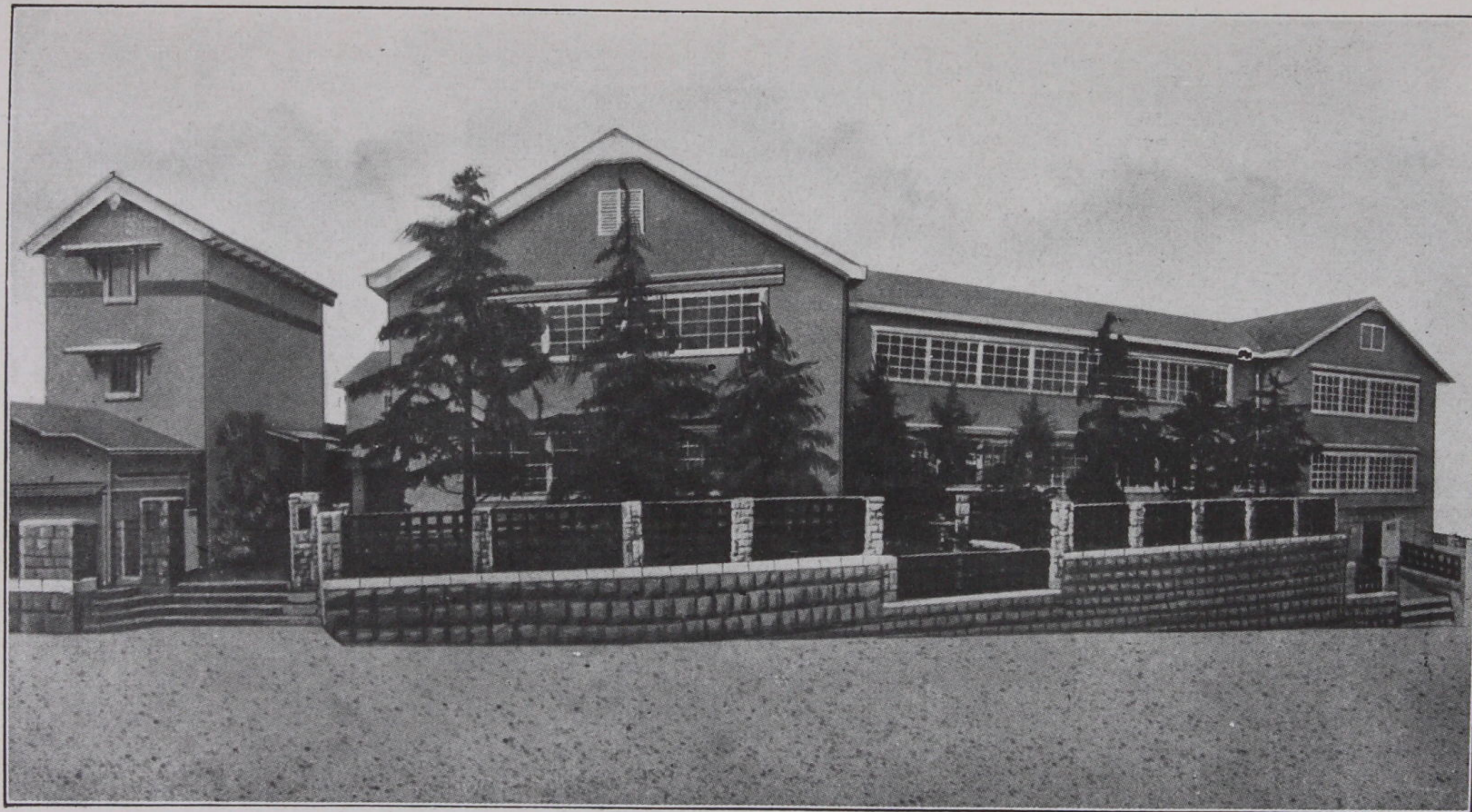


翁の令閨

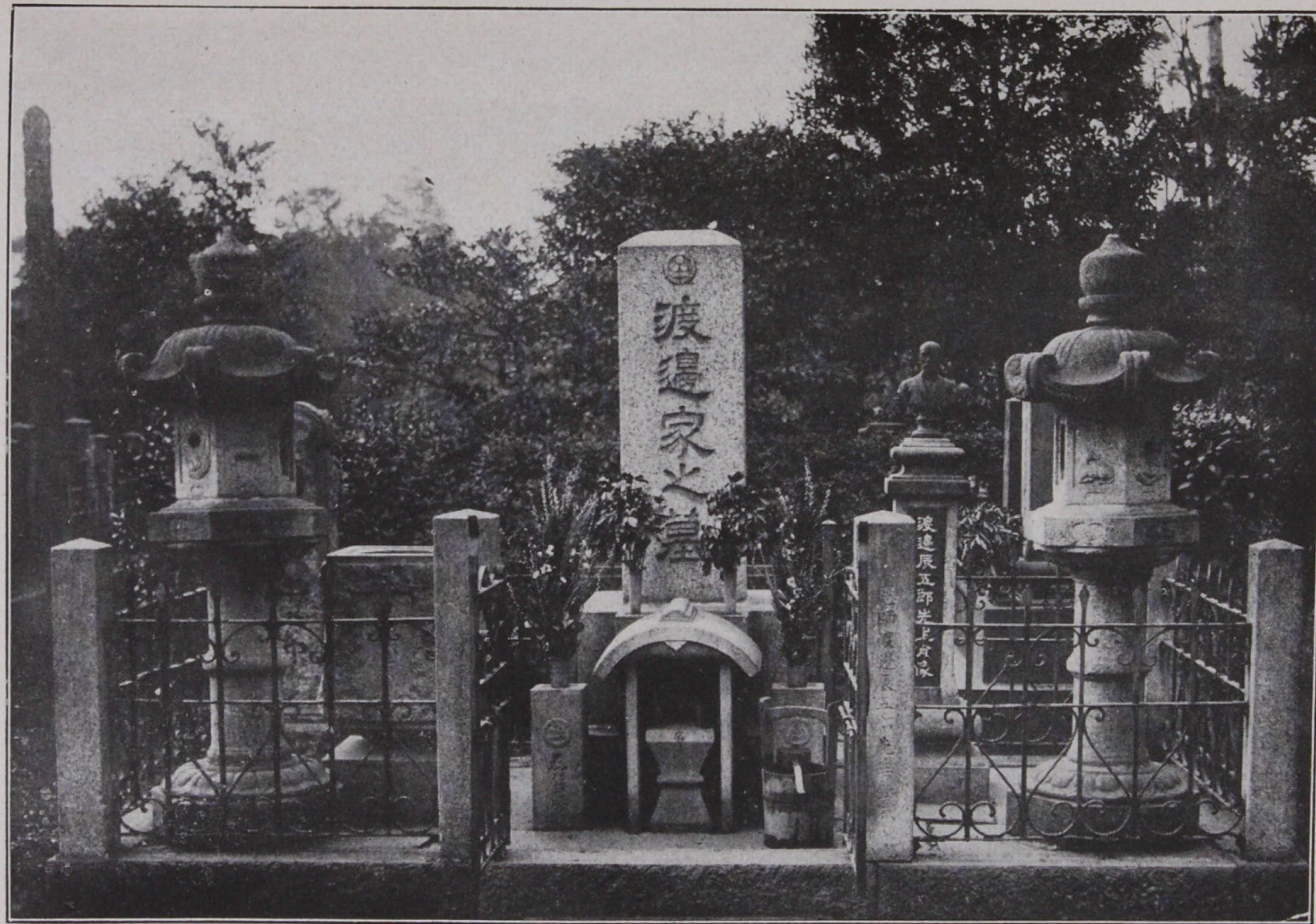


像銅の翁るたれらて建てつ依に人門に前生

吾師渡邊先生通稱曰辰
五郎上總國長南人少游
東京學裁製縫紉之術歸
鄉歷任諸學校再來東京
為共立女子職業學校裁
縫科主任任後辭之自開裁
縫學校於本鄉專教子女
四方來學者常數十百人
自明治初至今不知凡幾
萬於是弟子等相謀銅製
先生肖像建于學校前庭
以表景仰之意云
明治三十八年二月



(校學女縫裁京東校學門專子女京東)校學女邊渡の在現



墓の妻夫翁るけ於に中谷